

イザヤ——聖なる神との出会い

1. イザヤの時代

新約聖書には旧約聖書の言葉がたくさん引用されています。その数は 200 近く、細かく数えれば数百に達するかもしれません。新約聖書の中で最初に旧約聖書が引用されているのはどこか。それは、マタイ福音書第 1 章です。マリアとの婚約を解消しようかと悩んでいたヨセフの夢の中に天使が現れて言います。

『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。』このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』その名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」マタイ 1:20-23

天使が語ったその預言者、救い主の誕生を告げた預言者とはだれか。それはイザヤです。旧約聖書・イザヤ書にこう書いてあります。

「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」イザヤ 7:14

イザヤは、主イエスよりも 700 年あまり前、紀元前 8 世紀にユダ王国で活動した人です。イザヤとは「ヤハウエの救い」の意味で、「ヤ」は「ヤハウエ」（神の固有名詞）の略された形、「ハレルヤ」（ヤハウエをほめたたえよ）の「ヤ」と同じです。

紀元前 8 世紀のユダ王国とはどのような時代であったか。イザヤ書の中から聞いてみましょう。

「天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られる。わたしは子らを育てて大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。牛は飼い主を知り、ろばは主人の飼い葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らず、わたしの民は見分けない。災いだ、罪を犯す国、咎の重い民、悪を行う者の子孫、墮落した子らは、彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けた。」1:2-4

「支配者らは無慈悲で、盗人の仲間となり、皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。孤児の権利は守られず、やもめの訴えは取り上げられない。」1:23

「主は裁きに臨まれる、民の長老、支配者らに対して。『お前たちはわたしのぶどう畑を食い尽くし、貧しい者から奪って家を満たした。何故、お前たちはわたしの民を打ち砕き、貧しい者の顔を白でひきつぶしたのか』と、主なる万軍の神は言われる。」3:14

親を失った子ども、夫を失った女性、貧しい人々——その人々を、力を持った者たち、富を持った者たちが奪い、苦しめ、打ち砕いている、というのです。

「民は自分たちを打った方に立ち帰らず、万軍の主を求めようとしなかった。それゆえ主は、イスラエルから頭も尾も、しゅろの枝も葦の茎も一日のうちに断たれた。長老や尊敬される者、これが頭、偽りを教える者、預言者、これが尾だ。この民を導くべき者は、迷わす者となり、導かれる者は、惑わされる者となった。」9:13-15

人々は神を捨て、背を向けた。そういう時代にこそ指導者の責任は重いのですが、その指導者たち自身が墮落している。神の言葉を告げるべき預言者が偽りを教えている。これが当時の神の民イスラエルの現実でした。

2. 「聖なる、聖なる、聖なる万軍の神」——召命 6:1-13

そのような時代に、エルサレムに一人の若者がいました。国と社会の現状を憂い、その現実には悲しみと憤りを持っていました。彼は祈り、また自分がすべきだと思うことに力を傾けました。しかし一人の青年に何ができるでしょう。この国と人の現実を何とかしなければという切迫した思いと、何もできないという無力感の中に彼は苦しんでいました。悲観と絶望に陥ってどうすることもできませんでした。

ある日、この若者イザヤはエルサレムの神殿で祈っていました。祈っているうちに今まで経験したことのない空気を感じました。神が自分の前におられる。そう感じたのです。神殿いっぱい、神の衣の裾が広がっている。彼は天使が神の前を飛び翔けるのを見ました。セラフィムです。それぞれ六つの翼を持って飛び交っています。セラフィムは互いに呼び交わして唱えています。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」イザヤ6:3

聖餐式の後半、感謝聖別の祈りでわたしたちが唱える言葉はここから来ています。

天使セラフィムの呼び交わす声は響きわたり、その声によって神殿の入り口の敷居が揺れ動きました。神殿は煙に満たされました。

イザヤは神を見た。聖なる神に触れました。そのとき彼は「自分は死ぬ」と感じました。これまで彼はこの国と民族の墮落を嘆き、社会と人の悪に憤ってきました。しかし神の前に今彼が知ったのは、その墮落と悪、罪と汚れとは自分そのものだ、ということです。とりわけ彼は、自分の口がどれほど人を傷つけてきたかを痛切に感じました。自分の唇と共に自分は死ぬ。そう思ったのです。彼はうめきました。「オーイ……」

「災いだ（オーイ）。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」6:5

「するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわたしの口に火を触れさせて言った。『見よ、これがあなたの唇に触れ

たので、あなたの^{とが}咎は取り去られ、罪は赦された。』』 6:6-7

祭壇に燃える炭火、神の火が彼の唇に触れました。神の火がイザヤの唇を焼いたのです。唇と共にイザヤの魂が焼かれた。焼いて清められた。

「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

彼は罪の赦しを受けました。神の燃える火は審き滅ぼす火です。しかしその火は神の燃える愛の火であるがゆえに、彼を清め赦す火であったのです。

この時、彼は主の声を聞きました。

「『誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。』』 6:8

「我々……」というのは、神が天使を集めて会議を開いておられる情景を示しています。

「わたしは言った。『わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。』

主は言われた。『行け、この民に言うがよい、よく聞け、しかし理解するな、よく見よ、しかし悟るな、と。』』 6:8-9

こうして神はイザヤを、ご自分の言葉を伝える器、預言者とされたのです。

「よく聞け、しかし理解するな」というのは、多くの人々がイザヤの告げる言葉に耳を傾けないことを覚悟せよ、という意味が含まれています。

3. 「インマヌエル」——主が与えられるしるし 7:1-15

やがてイザヤは結婚し、子どもが生まれました。その子の名前は神から示されたのでしよう。

「シェアル・ヤシュブ」と名付けました。その意味は「残りの者は帰るであろう」です。

戦争が始まりました。イザヤの国はユダ王国です。エルサレムが首都です。北どなりの国はイスラエル王国、首都はサマリアです。ダビデ、ソロモンの時代は一つだったのですが、ソロモンの死後、南北に分裂したのです。その北王国イスラエルが南ユダ王国に攻め込んで来たのです。しかも北イスラエルはアラム王国と同盟したという知らせが伝えられました。

イスラエルとアラムが同盟したという知らせ聞いて、ユダの王と人々の心は動揺しました。「森の木々が風に揺れ動くように動揺した」と書いてあります (7:2)。当時のユダの王はアハズといいました。

その時、神はイザヤに命じて言われました。「あなたの息子シェアル・ヤシュブを連れてアハズに会いに行きなさい」 (7:3)。

首都エルサレムが敵に包囲される恐れがある。水を確保しなければなりません。アハズ王は地下を歩いてエルサレムに流れ込む水路の視察に出かけていました。シロアムの池の近くです。そこに行ってアハズにわたしの言葉を告げるように、と主はイザヤに言われたのです。

イザヤは神に言われたとおりに息子を連れて行きました。まだ 3 歳か 4 歳の幼児です。なぜこんな小さい子どもを連れて行くように言われたのでしょうか。

イザヤはアハズ王に会って主の言葉を告げて言いました。「あなたは恐れてはならない。イスラエルの王もアラムの王も燃え残りのくすぶる切り株のようなものだ。今こそ神に立ち帰りなさい。神こそがこの国を守られる。落ち着いて、神を信じなさい」(7:4)。

ここで息子シェアル・ヤシュブを連れて行った意味が明らかになります。シェアル・ヤシュブとは「残りの者は帰るであろう」という意味です。「たとえ多くの人々が神から離れて行っても、残りの者は神に帰って来るであろう。あなたは神の民ユダの王として、あなたこそその残りの者となって神のもとに帰りなさい。それが唯一の救いの道だ」。

幼い息子シェアル・ヤシュブは何も語りませんが、その名前が、その存在が、神の招き、神の呼びかけであったのです。

しかしアハズ王は聞こうとしません。そこで主はイザヤを通してアハズに言われました。「信じられないというのなら、しるしを求めなさい。神が確かに生きておられることをあらわすしるしをあなたに示そう」(7:11)。

けれどもアハズは「わたしはしるしを求めない。主を試すようなことはしない」と言いました。

一般に神のしるしを求めるのは信仰上誤ったこととされます。しかしぎりぎりの場合に、神が生きておられることを示すしるしを与えられることがあるのです。今、神はこのアハズを何としてもご自分のもとに引き寄せようとされた。信じられないなら、信じて平安を得るために、神ご自身がしるしを与えようとされたのです。ところがアハズはそれを拒みました。信仰的な口ぶりによって、神の招きを拒否したのです。

イザヤは激しく落胆し失望しました。これほど神が激しく呼びかけておられるのに受け入れようとしないのか。しかしその時イザヤの口をついて出たのは、にもかかわらず神ご自身がしるしを与えられる、という言葉でした。

「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」 7:14

おとめが身ごもって男の子を産む。その名をインマヌエルと呼ぶ。やがて生まれるその子が、インマヌエル、「神がわたしたちと共におられる」というしるしとなる、というのです。

これは 700 数十年を経て実現します。ヨセフが夢の中で天使から聞いたのはこの言葉でした。おとめマリアから生まれるその子イエスさまこそ、神が生きておられるという事実をあらわすしるし、神がわたしたちと共におられるというしるしです。

4. 「この民の行く道を行かないように」——軍事同盟への否 8:5-15、30:1

アハズ王はイザヤを通して語られた主の言葉を聞かず、戦争の準備をするばかりでした。しかしこの戦争はしてはいけない、それは神の御心に反する、というのがイザヤの確信でした。やがてイザヤに二人目の子どもが生まれます。二人目の子どもにも神が名前を与えられました。「マヘル・シャルル・ハシュ・バズ」という名前です。意味は「分捕りは早く、略奪は速やかに来る」です。戦争によって生じる事態を予告する名前でした。

北イスラエルとアラムの同盟に対して、アハズ王はエジプトと同盟して対抗しようとしていました。アハズ王とユダの国の人々は雪崩を打って戦争の準備を進めていきます。そこにあるのは恐怖です。恐怖を武力によって静めようとするあせりです。イザヤは言います。

「諸国の民よ、連合せよ、だがおののけ。遠い国々よ、共に耳を傾けよ。武装せよ、だが、おののけ。武装せよ、だが、おののけ。戦略を練るがよい、だが、挫折する。決定するがよい、だが、実現することはない。神が我らと共におられる（インマヌエル）のだから。」8:9-10

しかし王も人々も耳を貸そうとせず、戦争への道を突き進みます。「神を信じて静かにしていなさい」というのはただの理想論に過ぎないのでしょうか。イザヤは無力を感じました。自分の言葉も働きも空しいものなのか。時の勢い、世の中の流れに抵抗してもむだなのか。

しかしこの時、神がイザヤを捕らえて言われた、というのです。

「主は御手をもってわたしをとらえ、この民の行く道を行かないように戒めて言われた。あなたたちはこの民が同盟と呼ぶものを何一つ同盟と呼んではならない。彼らが恐れるものを、恐れてはならない。その前におののいてはならない。万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。あなたたちが畏るべき方は主。御前におののくべき方は主。」8:11-13

神ご自身が御手をもってイザヤを捕らえて言われた、というのです。「この民の行く道を行ってはならない」。「あなたたちはこの民が同盟と呼ぶものを何一つ同盟と呼んではならない」。神と同盟せずに一体何が同盟か。

戦争準備へとあおり、あおられて行くのは、本当に畏るべき方を知らないからです。

「万軍の主をのみ、聖なる方とせよ」。

もしこの時、神ご自身がイザヤを捕らえくださらなければ、イザヤは失望のあまり世の中に妥協したか、それとも嘆きのあまり憤死したかだったでしょう。しかし神が彼を捕らえてくださったので、彼は自分を保ち、短期決戦を考えず長期的展望を持つようになりました。

「わたしは弟子たちと共に、証しの書を守り、教えを封じておこう。わたしは主を待ち望む。主は御顔をヤコブの家に隠しておられるが、なおわたしは、彼に望みをかける。見よ、わたしと、主がわたしにゆだねられた子らは、シオンの山に住まわれる万軍の主が与えられたイスラ

エルのしるしと奇跡である。」8:16-18

今はこうであっても、必ず神の言葉が聞かれる時が来る。その時に備えて神の言葉を堅く保つていよう。イザヤは、自分と妻に与えられた二人の子どもたちの存在をかけがえのないものと感じました。シェアル・ヤシュブとマヘル・シャラル・ハシュ・バズ。この二人の子どもたちは、神が生きておられことのしるしである。目に映るのは神に背いて戦争へと走る姿ばかり。しかしこの子らは、神が生きておられることを示す目に見えるしるしだ。イザヤは妻と共に、深い慰めを受けたことでしょう。

5. 「平和の君」——主の熱意 9:1-6

現実のユダ王国の社会は暗黒でした。軍事費の増大の中で、貧しい人々はさらに貧しくされ、孤児ややもめはいっそう厳しい状況に置かれました。この国は間違っている、と叫んできた預言者の声は聞かれません。しかしこの闇の中にイザヤは大きな光を見ました。幻といってもよいのかもしれませんが。言い換えればビジョンです。現実が闇であっても、その向こうには光がある、可能性がある、神が用意してくださる新しい歴史がある。その可能性に自分を賭けてイザヤは生きていきます。

信仰は現実を見つめるとともに、現実を越える神の可能性を見るのです。

「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。あなたは深い喜びと大きな楽しみをお与えになり人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように、戦利品を分け合って楽しむように。彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を、あなたはミディアンの日のように折ってくださった。地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく、火に投げ込まれ、焼き尽くされた。ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって、今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」9:1-6

神が幻を、やがて実現するビジョンを示してくださった。イザヤが見たのは、神の光のもとで新しい歴史が始まる、という幻です。戦争のための軍装、軍備は火に投げ込まれます。わたしたちのための生まれるひとりの男の子が、平和を実現されるのです。

「その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる。」

平和、正義、恵みの業——これらが新しい時代のキーワードです。平和と正義と恵みの業を行おう。「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」。神の熱意が平和を実現させる。

「わたしは熱情の神である」——これはかつてモーセとイスラエルの民がシナイ山で聞いた神の自己宣言です（出エジプト記 20:5）。熱情の神。神は人とこの世界を救おうとする情熱を持っておられる。神の情熱は人に伝染する。神の情熱に触れた者は、自分も情熱を燃やして神に仕える者となる。そのひとりがイザヤでした。平和を実現しようとされる神の情熱。これに触れた者も、平和の実現に向かって生きることになるのです。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。……その名は、『平和の君』と唱えられる」。

イザヤがその到来を告げた救い主イエス・キリスト。この方は「平和の君」として、平和の実現へとわたしたちを招いておられます。

6. 「霊が高い天から注がれる」——平和への神の情熱と霊の注ぎ 11:1-5 32:15-18

イザヤの預言者としての召命を語る第 6 章から 7、8、9 章までの概略を追ってきました。ここでイザヤが告げた「神の霊の注ぎ」ということについて触れておきます。

今、神の熱意、神の情熱ということを申しましたけれども、これはそういうこともあるか、という程度に聞いておくようなことではありません。神が願われるのは、神の情熱が人の中に燃える現実となる、ということです。神の情熱が人の現実となる。そのために神がなさることがあります。それは「神の霊を人に注ぐ」ということです。イザヤは神の言葉と霊を受けて次のように語りました。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち

その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊。

彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない。

弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。

正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。」11:1-5

主の霊を受けた人。その人が弱い人のために正当な裁きを行い、貧しい人々を公平に弁護する。

「新共同訳」には「平和の王」という見出しが付けられています。この人とはだれか。それはイエス・キリストのことです。主イエスは洗礼において神の霊を受けられた。神の霊が主イエスの中で働き、主イエスをとおして働いていた。

しかしそれだけではありません。主イエスに注がれ、イエスを生かしていた霊は、わたしたちにも注がれるのです。

「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」。

これは堅信式の式文の言葉です。主教の按手を通してわたしたちに注がれるのは神の霊、主イエスの霊です。神の情熱を受け、神の願われるごとくに生きて行けるように、神の霊を受けて力づけられる。これが洗礼であり、堅信です。

もう一つ、神の霊の注ぎの約束を聞きましょう。

「ついに、我々の上に、霊が高い天から注がれる。荒れ野は園となり、園は森と見なされる。そのとき、荒れ野に公平が宿り、園に正義が住まう。

正義が造り出すものは平和であり、正義が生み出すものは、とこしえに安らかな信頼である。わが民は平和の住みか、安らかな宿、憂いなき休息の場所に住まう。」 32:15-18

7. 「彼らを聖なる者としてください」——主イエスの祈り ヨハネ 17:17

ところで、イザヤに出会い、イザヤを通して語られたのは「聖なる神」でした。エルサレムの神殿でイザヤが聞いたのは、セラフィムの合唱でした。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」 6:3

聖なる神に直面してイザヤは自分の汚れを知り、死を覚悟しました。その彼を聖なる神が火で焼き清められました。

イザヤが出会った「聖なる神」とは何か。

第一に、この世界と人の罪の姿を照らし出す神です。わたしたちの汚れが照らし出されるとき、わたしたちは場合によっては死ぬ経験をさせられる。

第二に、しかし聖なる神は清める神、赦す神です。聖なる神は実は愛が燃える神であって、わたしたちを放置せず、わたしたちを清め、赦すのです。それがイザヤが経験したことでした。

第三に、聖なる神は人をこの世界に派遣する神です。弱い人、貧しい人々を虐げるこの社会、戦争に向かって傾斜していくこの世界にわたしたちを派遣する。平和と正義が実現するために、わたしたちを霊によって力づけて送り出されるのが聖なる神です。

これは、新約聖書でイエス・キリストによってあらわされた神と同じ神です。ペテロはイエスとの出会いにおいて自分の罪を痛切に知りました。しかしイエスは最後の晩餐においてペテロの汚れた足を洗われました。そうして彼はイエスから清めと赦しを受けたのです。そしてやがて彼は宣教のために派遣されました。

ヨハネによる福音書によれば、最後の晩餐において主イエスは弟子たちのために祈られました。語るだけのことを語った後は祈るしかなかったのです。

「わたしが願うのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。」ヨハネ 17:15-19

神が聖なる神だ、というだけではありません。「真理によって、彼らを聖なる者としてください」。イエスが弟子たちのために祈られたのは、「弟子たちが聖なる者となるように」という祈りでした¹。

聖なる神に属する聖なる者となる。

それは、神の赦しと清めを受ける者となる、ということです。そしてこの世界に派遣される者になる、ということです。

かつてイザヤに起こったことが、今、弟子たちにも起こりますように。かつてイザヤを通して語り働かれた神が、わたしたちを通して語り働かれますように。——それがイエスの祈りでした。

主イエスが祈ってくださる。最初の弟子たちのためだけではなく、今の弟子たちであるわたしたちのためにも祈ってくださる。その祈りに支えられて、わたしたちも神さまの働きを担っていくのです。

2003/10/10 日本聖公会京都伝道区信徒伝道協議会「秋のキリスト教講座」

「預言者のこえに聴く——まことの平和を求めて」第1回

京都教区センターにて

¹ 「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。」 I テサロニケ 5:23